矛盾した恋ですが、文句ありますか？

０．５％

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
矛盾した恋ですが、文句ありますか？

【Ｎコード】
Ｎ５５１２Ｑ

【作者名】
０．５％

【あらすじ】
作者の欲望をただただ詰め込んだだけの小説たち。主に２組のカップルたちの話。ときどきエロが入るかもしれない。きっと。

恋する乙女と新人類

「ふぁぁ……っ」
「圭士郎さん、寝不足ですか」
何でも屋の仕事中。圭士郎さんが作業をしながら、大きな欠伸をしていた。表のからは、店長である柚留（ゆずる）の怒声が聞こえる。いつものことだが、客がドン引きしているだろう。
俺と圭士郎さんは、いつもどおり、店の裏のほうで内職のような細かい仕事をしている。
「あふ……っ。いや。4月になって、あったかくなってきてるからよ……。気候に体が慣れてねぇから、眠くなっちまうんだよ……。ふぁあ……」
そう言いながら、圭士郎さんはまた欠伸をする。猫みたいだな…。なんてことを思っていると、柚留が中に入ってきた。
「はぁ。なんなんだ、エミリは！！　眠いとか言って、全く仕事してくれないし！　小春ちゃんと仁さんが頑張って働いてるけど、表の仕事が全然捗（はかど）らない！　龍汰、エミリに仕事しろって言ってくれない？」
エミリが仕事をしない。だから、俺がエミリに仕事をするように言う。なんで俺がやるんだろう。毎回そうだ。柚留や、小春、圭士郎さんも、エミリのことで困ると、いつも俺に言ってくる。俺に言って、何かあるのだろうか。
そんなふうに思って、なかなか動かないでいると。
「行ってこいよ、龍汰。お前にしかできねぇんだから。オレなんかが言ったら、逆効果だし…」
圭士郎さんが言ってきた。たしかに、圭士郎さんとエミリの仲は最悪だ。顔を合わせるだけで喧嘩。声を聞いただけで喧嘩。どこへ行っても喧嘩ばかりだ。でも、肝心な仕事のときは、息がピッタリだ。

「圭士郎さんに言われたら、しょうがないですね」
「っ、！」
「……はぁ……。バカップル……」
俺の言葉に、圭士郎さんは顔を真っ赤にして、柚留は溜息を吐いた。お前らだって、十分バカップルなくせに。
そう思いながら表へ出ると、エミリがカウンターで転寝をしかけていた。
小春と仁さんが慌てて接客をしている。これは、流石にあの二人でも大変だな。
「おい、エミリ。起きろ」
「んー……っ。ぁっ、龍汰！」
俺の声を聞いたエミリが、こっちを勢い良く向いた。その顔は、どこか輝いている。なぜだろう。
「仕事しろ。あの二人が大変だろ」
「うんっ！　龍汰が言うなら、あたし、頑張るわっ！」
「？　仕事するなら、いいけど…」
俺が言うと、エミリはテキパキと仕事を始めた。俺はそれを見て、裏に戻る。そのときに、エミリが「まぁ、龍汰はあたしなんか、眼中にないんだけどね」と、呟いた気がした。

「ありがとう、龍汰。いつもごめん。本当に助かるよ」
戻ってくると、柚留が礼を言ってきた。
「別に。仕事してもらわないと、小春と仁さんが大変だからな」
「でも、龍汰は本当にしっかりしてるよ。ありがとうっ！　圭士郎もしっかり働いてくれるから、仕事が捗るよ」
「いや。オレは普通に仕事してるだけだし」
そう言う圭士郎さん。さっきまで机の上にあった物が、全部袋に入れられている。圭士郎さんが、俺のいない間にやってくれたんだろう。この人は、なぜか異様に内職が得意なんだよな。
「じゃあ、内職組も終わったし、外で仕事してくれるかな？」

柚留が袋をまとめながら言う。
俺と圭士郎さんは、表に出て、仕事を始めた。

「圭士郎のばーか」
「てめぇは、なんだよさっきから！！」
閉店時間。オレは店の片付けをしている。そんなオレの耳障りになる言葉を吐き続けているのが、エミリだ。
エミリがこういうことを言ってくるのは、いつものことだ。しかし、今日はいっそう酷い。一体オレが何をしたというんだ！
「ふんっ。あんたはいいわよね。龍汰が恋人なんだから」
「！？　あっ、ヤバっ」
エミリの唐突な一言に驚いてしまい、何段にも積んで運んでいたダンボールが落ちそうになる。
「ちょっ、ぁっぶないわねぇ！　何してんのよ！」
それを、丁度カウンターに座っていたエミリがおさえてくれた。
「何してんじゃない！　お前のせいだろ、小娘が！」
「なーんであたしのせいなのよ！　落としそうになったアンタが悪いでしょ、この年増野郎が！」
「んなっ、オレは女じゃねぇから、年増とは言わねぇよ！」
なんだろう。ツっこむところが違う気がしているのは、オレだけだろうか。
「アンタ、知ってるでしょ！　あたしが龍汰を好きだってこと！」
エミリにそれを言われて、思い出した。
そういえば、コイツは龍汰が好きだったんだっけ。昔聞いたけど、オレに突っかかってくる理由も、オレが龍汰の恋人だってことが、ムカツクからだったよな……。
「はぁ。龍汰がわかんないわ。コイツのどこがいいのかしら。しかも、男だし」

ホモとか、新人類よね。
エミリはそう言って、オレの落としそうだったダンボールを運んでいってくれた。
最後の一言はどうかと思うが、エミリは結構いい奴かもしれない。
「圭士郎さん、こんなところで突っ立ってると、柚留に怒られますよ。柚留、今、不機嫌だから」
そんなことを考えていると、龍汰が来た。
「わっ、龍汰っ」
「どうしたんですか。俺がここに来たら、なんか悪いことでもありますか？」
「いや、違う。気にすんなっ。ところで、なんで柚留、不機嫌なんだ？」
思わず驚いてしまい、龍汰が若干気分を害したようだ。すまん、龍汰。
「さっき小春と話しているときに、セクハラされたんですよ。仁さんに」
「……柚留が可哀想だ……」

「俺は、圭士郎さんにセクハラはしませんよ」
「襲ってくるくせに！」
「男はみんな、血に飢えた野獣なんですよ」
「どうしてウチの店には、新人類しかいないわけっ！？　こはちゃん、あたし泣きそう！」
「よ、よしよし。私たちは、頑張ろう」
「柚留ー、そんなに怒るなよー。可愛い顔が台無しだぞ」
「うるさいですよ！　説教中にそういうこと言わないでください！気が散るでしょう！」

恋する乙女と新人類（後書き）

わぁ、柚留くんが可哀想だ。エミリは龍汰のこと好き。大好き。だけど、龍汰は圭士郎兄さんを愛している。超矛盾だなぁ。仁さんと柚留くんは付き合ってる。でも、仁さんが変態で、柚留くんたまに嫌になる。小春ちゃんだけ恋愛してない傍観者。

誘ってる？　いや、ないから

今日はキサラギが定休日の日だ。だから、必然的にオレたち店員も休みになるわけで。まぁ、こんなことは当たり前だが。何言ってんだ、オレ。

だから、龍汰と過ごすことにした。いや。したっていうか、されたっていうか……。べっ、別に、オレが龍汰と一緒にいたいとか言ったわけじゃねぇよ！　ただ、その、オレも気が向いたっつうか、いいかって思ったっつうか……。あぁ、もう勝手に解釈してろよ！　混乱してきた！

ぁ？　今は何してるかって？

あーと……。

「はっ、なっ、せぇぇぇっ！！」

「嫌です」

龍汰に後ろから抱きすくめられている状態だ。

なぜだ！？　なぜこうなったんだ！？

「っんでこんなことになってんだよ！」

「なんでって……。圭士郎さんが可愛いからですけど」

「わけわからねぇよ！」

龍汰に聞いても、返事はこんなだ。まぁ、れっきとした理由はないのだろう。数時間前から、ずっとこんな感じで、オレを放そうとしない。

自力で逃げればいい？　馬鹿野郎！　できたらしてるわ！

逃げれないんだよ。なんでって、そりゃ、その……。ぉっ、オレが龍汰より９センチほど小さいから……。力だって、龍汰のほうが強い。だから、オレがいくら抵抗してもびくともしないわけで。

なんでオレって、ちっこいんだろう……っ。

「はぁ……」

龍汰は、２８歳のおっさんのどこが可愛いんだろうか。まぁ、自

分で言うのもなんだが、オレは年の割りには若く見えるけどよー…。
「圭士郎さん」
考えていると、龍汰がオレに話しかけてきた。後ろを向くのが面倒だから、オレは前を向いたままで返事をした。すると、
「こっち向いてください」
そう言われた。
なんで、わざわざそちらを向かなければならないのだろう。オレは面倒だと思いつつ、龍汰のほうを向いた。
その瞬間。
「なん、っ、！」
唇に何かを押し付けられた。しばらくの間、何が起こったかわからなかった。が、やっと脳内が整理できて、何をされているかがわかった。
もちろん。
キスに決まってる。
「ん、ふっ、」
しかも、ディープなほう。
ぅわぁぁぁぁぁあ、最悪だぁぁぁぁあっ！！！　オレ、すっかり油断してた！！　コイツといるときは、それだけでも危険なほうなのに、どうして警戒していなかったんだ、オレ！
しかし、そんなことを思っているのは、頭の片隅のほう。中心部は、キスのせいで何も考えられなくなっていた。
抵抗なんて、キスのせいで力が入らないからできない。
だから、龍汰にされるがままだ。
数秒後。
「っ、ぷはっ！」
「…んっ」
やっと龍汰が離れて、オレは酸素を十分に取り込めるようになった。
そして、痺れる思考をなんとか動かして、龍汰を睨みつけながら

問う。
「てめ、りゅ、た……っ。なにしてんらよ……っ、つ！」
「なにしてんらよ……？　っく……」
うまく呂律が回らないせいで、おかしくなってしまう。だぁぁっ！！　恥ずい！
そんなオレを、龍汰が喉で笑っている。あぁぁあ……っ。
「圭士郎さん、本当に可愛いですよね。キスだけでこんなに真っ赤になって…。誘ってるんですか？」
「っ、ば、そんなじゃねぇ！！　てか、可愛くねぇ！」
龍汰がオレをからかってくる。コイツ、ほんとに性悪だよ……！
恥ずかしくて、居た堪れなくなって、オレは龍汰の腕に顔を埋（うず）めた。抱きつかれたままなんだよ！
「……圭士郎さん、誘ってますか、やっぱり」
「だぁら、誘ってねぇよ！」
やっぱり、コイツは苦手だ。
急に変なことしてくるしよ……っ。てか、キスきもちかった……。
そんなことを上の空で考えていると。
「圭士郎さん、人前でそういう顔しないでくださいね」
「へ？　そういう顔って、なんだ？」
「……いや。いいです」
オレが聞くと、龍汰はそう言って溜息を吐いた。なんなんだろうか。一体。
まぁいいか。
ちなみに、オレは一日中龍汰に放してもらえなかった。

「いい加減放せっ」
「嫌ですよ」

「なんでだよ！」
「圭士郎さんが抱き枕に丁度いいからです」
「は！？　お前、このまま寝る気か！？」
「おやすみなさい……」
「ちょっ、龍汰！　おい、龍汰！　おいってば、起きろ、ちょ、ぅ
あー……っ！　最悪だ…」

誘ってる？　いや、ないから（後書き）

おい、龍汰そこ変われ。……すみません。相変わらず迷走ぎみです。
何がしたかったんだよ、自分。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5512q/

矛盾した恋ですが、文句ありますか？

2011年4月5日22時40分発行